

Contents	
1	失われた大会 九州大学総合研究博物館 館長 緒方 一夫
2	大学博物館等協議会 2019 年度大会・第 14 回日本博物科学会開催報告 秋田大学鉱物博物館 前館長 今井 忠男
4	旧制松本高等学校・創立 100 周年事業と 「北杜夫と昆虫」サテライト企画展 信州大学自然科学館 館長 東城幸治
6	静岡大学キャンパスミュージアムの改修と “ウェルカムエリア” 構想 静岡大学キャンパスミュージアム 館長 塚越 哲
7	iPS 細胞研究所設立 10 周年記念展示と 新型コロナウイルス感染防止のための休館措置 京都大学総合博物館 准教授 塩瀬 隆之
9	特別展「香川大学五代学長 倉田貞美博士の業績」 香川大学博物館 事務補佐員 井上 幸恵・館長 寺林 優

失われた大会

九州大学総合研究博物館 館長 緒方 一夫

本来ならば、来年のニュースレター第 23 号(2021 年)で大学博物館等協議会 2020 年度大会と第 14 回の日本博物科学会の開催報告が掲載されるはずであった。そこでは 2020 年 6 月に九州大学総合研究博物館(以下九大博物館)での集会の状況がレポートされるはずであった。

福岡での開催は 2007 年の第 10 回大会(博物科学会としては第 2 回)以来の 13 年ぶり。九大博物館は 2000 年に開設、2020 年は設立 20 周年となる年でもある。キャンパス本体が移転し、かつて九大本部があった箱崎キャンパス跡地はすでに売却のため整地がすすんでいる。ただし、旧工学部本館と旧本部事務棟は歴史的建築物として取り壊さず保存される予定である。跡地の整備完了までの暫定的な期間、旧工学部本館がほぼ「まるごと博物館」として利用されている(写真左)。2020 年の大会はこの空間を利用した企画だったのだ。

九大博物館では前田晴良教授を中心に大会事務局を設置、協議会事務局や 2019 年度開催校の秋田大学との引継ぎ、シンポジウムの企画や講演予定者との調整も済ませ、4 月 3 日付で「第 23 回大学博物館等協議会大会・第 15 回日本博物科学会学術大会(九州大学)開催のお知らせ」と参加申し込みフォームまで準備していた(写真右)。

2020 年の大会では、規約改正を含む重要な審議が予定されていた。また館内展示、医系キャンパス

のツアー、伊都キャンパスのツアーなど多くの見せ場も企画していた。特にシンポジウムでは「大学博物館とクラウドファンディング-その光と影-」と題して、4 名の方々の事例を紹介していただくことになっていた。

クラウドファンディングは大学博物館の資金調達の方法として期待され、支持層を拡大する新しい方法としても注目される。九州大学は 2018 年にクラウドファンディング会社「レディーフォー」と業務提携を開始し、学内の諸活動を支援する仕組みを立ち上げた。2020 年 5 月まで 12 件のプロジェクトが成立、総額で 3500 万円以上の寄附を頂いている。このうち九大博物館では前田晴良教授による「オールアンモナイトプロジェクト」と三島美佐子准教授による「九大什器保全活用プロジェクト」の 2 件を実施した。シンポジウムではこれらに加え山形大学附属博物館の佐藤琴准教授による土偶修復プロジェクト、徳島県立博物館の辻野泰之氏による恐竜発掘のプロジェクトについて紹介。クラウドファンディングは実施にあたって企画の立て方、寄附の動向、寄附終了後の返礼など、注意すべき点もある。実際に体験された方々による講演と質疑は大学博物館活動の資金集めを考える上で有効なはずだ。

しかし、私たちが大会の準備を進めている間に、新型コロナウイルスによる感染拡大が進んだ。1 月より中国で本格的な拡大がはじまり武漢市封鎖などの措置が取られ、2 月には COVID-19 と命名された新型コロナウイルスが世界的に拡散、日本での感染者も報告され、各国では防止対策が本格化、3 月に WHO がパンデミックを表明、国内でも

学校の卒業式の中止や縮小など拡大防止に向けて緊迫した状況となった。九大博物館では3月2日より休館として警戒態勢に入った。4月7日に発令された緊急事態宣言で福岡県もその対象に含まれたことを受け九州大学では講義の休止、教職員の在宅での業務が求められた。

2020年の大学博物館等協議会・日本博物科学学会大会をめぐっては、4月10日に「拡大三役会議」として協議会事務局の岩崎奈緒子教授（京大博物館）の調整でオンライン会議を開催。永益英敏会長（京大）、寺林優副会長（香川大）、西秋良宏監査（東大）、および開催予定校の緒方の間で本年度の実施について協議し、福岡での開催を中止することを決定、4月14日にHP上で通知した。かくして九州大学での2020年度の第23回大学博物館等協議

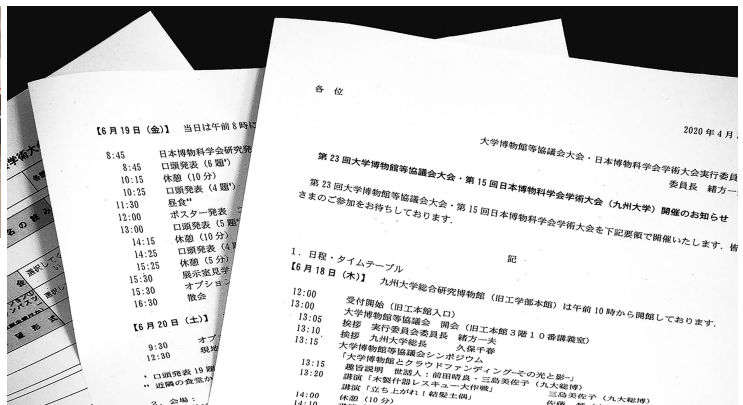
会大会・第15回日本博物科学学会学術大会は見送られた。

2020年は歴史に残る年として記憶されることは間違いない。博物館関連では、5月14日に「博物館における新型コロナウイルス感染拡大予防ガイドライン」が日本博物館協会から出されている。ICOMも声明を出しているし、ロンドンやウィーンなどでは新型コロナウイルスによる影響そのものを博物館の資料として収集しているところもある。異常な時期を記録し、後世の人々に残すのも博物館の役割であろう。

開催の機会を失した2020年の大学博物館等協議会大会ではあるが、その計画と中止にいたる経緯は記憶として残しておきたい。またシンポジウム企画は是非どこかで生かされることを願いたい。



九州大学旧工学部本館は現在大部分が博物館として利用されている



2020年の大学博物館等協議会と日本博物科学学会の大会についての幻の通知と参加申し込み

大学博物館等協議会 2019 年度大会・第14回日本博物科学学会開催報告

秋田大学鉱業博物館 前館長 今井 忠男

1. はじめに

第22回大学博物館等協議会2019年度大会および第14回日本博物科学学会が2019年6月27日(木)・28日(金)に、秋田大学手形キャンパスで開催されました。参加人数は92名(加盟館・機関26組織、他4組織)と、遠く秋田の地まで多くの方々にご参集頂きました。初日はあいにくの雨となりましたが、参加者の皆様方には、移動に大変ご不便をおかけしましたが、翌2日目には雨も止み、最後の見学会まで無事に実施できました。以下に、本大会の内容を時系列で報告いたします。本会は、2つの組織(協議会、学会)の役員会と総会および関連行事を同時

に開催いたしますので、煩雑な記述になっておりますが、基本の内容は総会と講演会・研究発表会についてです。

2. 協議会シンポジウム「地域特性のある資料を通じた博物館・図書館・美術館の連携」【1日目】

はじめに協議会の開催にあたり、実行委員長(秋田大学 今井忠男)の挨拶のあと、秋田大学理事で副学長の志立正知先生から、祝辞を頂きました。志立先生からは、大学博物館の活動へ期待が寄せられました。

本シンポジウムの趣旨は、地域の博物館・図書館・美術館はどのような連携が可能か?という視点にあります。そこで、これまで秋田大学を中心に進めてきました、秋田県内の鉱山関連資料を通じた、県内各館との連携の取組み例を紹介し、これら取組み事例の波及性について議論しました。具

体的には、次の4つの博物館・図書館・美術館から、秋田の鉱山資料との関わりについて講演していただきました。

- ・「鉱山絵図から読み解く秋田の鉱業史」今井忠男（鉱業博物館）
- ・「秋田大学鉱山絵図・絵巻デジタルギャラリー」杉山禎広氏（秋田大学附属図書館）
- ・「菅江真澄と鉱山の記録」松山修氏（秋田県立博物館）
- ・「秋田の美術と鉱山との関係ー秋田蘭画をはじめとしてー」松尾ゆか氏（秋田市立千秋美術館）

これら講演につづき、講演者をパネリストとしたディスカッションが、西川治氏（鉱業博物館）の司会によって進められました。会場からは、秋田蘭画など、個々の資料への質問から、資料の収集・保存の体制など、多岐にわたる多くの熱心な質問が寄せられ、30分程度のディスカッション時間では足りない状況となりました。鉱山関連資料というマイナーな分野においても、幅広い分野の研究者の方々から興味を持って頂いたことから、このシンポジウムの趣旨や秋田県内での取組みについて十分に伝わったと感じられました。

3. 館長会議および博物科学会理事会と協議会総会および博物科学会総会

館長会議および理事会では、両会の代表である東京藝術大学の秋元雄史氏が議長を務められ、昨年度の決算および役員の改選が行われました。決算が了承されるとともに、令和元年度から両会の会長校は、京都大学総合博物館が務められることになりました。今年度の予算の決議と行事予定については、新会長の永益英敏氏（京都大学総合博物館長）が議長となり、議事が進められました。そこで、秋田大学から「協議会主催のシンポジウムを市民開放としたい」という提案がなされ、今後は各大会の開催校（実行委員会）の判断で、市民開放も可能という結論となりました。なお、次年度の大会は九州大学総合研究博物館で開催されることとなりました。

上述の役員会に続き、両会の総会がそれぞれ行われましたが、それぞれの役員会での原案が了承され、無事に終了しました。

4. 懇親会

懇親会では、会のはじめに野外で秋田大学竿燈会による竿燈の演技をお披露目する予定でしたが、あいにくの雨のため、附属図書館のホールでの「竿

燈」の展示と、懇親会会場の学生会館において、「竿燈囃子」の実演が行われました。狭い会場の中に、大太鼓を持ち込んでの生演奏は迫力満点で、参加者に秋田の夏祭りを先んじて楽しんで貰いました。そのあと、新会長の永益先生のご挨拶と乾杯で懇親会は始まりました。懇親会では、秋田の銘酒8種類、きりたんぼ鍋、稲庭うどんなど、秋田名物を堪能していただき、用意した日本酒は、余すことなく完飲されておりました。会場の外は豪雨でしたが、とても盛り上がった懇親会となりました。最後に、次年度開催校である九州大学総合研究博物館の緒方一夫館長の挨拶によってお開きとなりました。

5. 博物科学会研究発表会(口頭発表およびポスター発表)【2日目】

研究発表会では、「マネジメント」、「研究」、「展示」、「地域社会と連携」、「教育」、「情報」の幅広い分野から、全19件の口頭発表と6件のポスター発表が行われました。非常にタイトなスケジュールなため、盛んな質疑応答にも関わらず、十分な質疑時間が取れなかったことが悔やまれました。また、研究発表会の開催時間の間、会場前の廊下でポスター発表も行なっていたため、休憩時間には、ポスター前で活発な議論も行われていました。今後、発表件数の多い場合についてのスケジュール調整については、検討の余地があると思われます。

6. 鉱業博物館見学会(ガイドツアー)

15:10まで研究発表会を行なったのち、見学希望者の約80名は、標高差30mほどある見学先の鉱業博物館へ徒歩で向かいました。16:10の散会までの短い見学時間でしたが、見学者を4班(各20名)に分け、長年、鉱業博物館のガイドを務めておられる4名のサイエンスボランティアによって、3階建の全展示スペースを見学してもらいました。当館では、この大会に合わせて、令和元年度第1回鉱業博物館特別展「秋田に残る 鉱山絵図・絵巻の世界」(6月27日(木)～9月30日(月))を開催しており、秋田大学で所蔵する鉱山絵図・絵巻のコレクションと、県内の資料館および個人が所蔵する鉱山絵図の複製を展示いたしました。短い時間なため、十分に鉱業博物館を堪能しては頂けませんでした。皆様が多種の鉱物・鉱石や鉱山資料に興味を持って楽しんでおられる様子が伝わってきましたので、主催者の我々も嬉しく感じてお

りました。見学会ののち、博物館前に用意しました秋田駅行きの貸切バスで皆様をお見送りして、二日間の大会は終了いたしました。

7. おわりに

初日は梅雨の大雨に見舞われて、行事進行が困難となった場面もありましたが、秋田大学での大

学博物館等協議会および日本博物科学会を盛会のうちに終了することができました。関係各位のご協力に感謝するとともに、とくに鉱業博物館サイエンスボランティアの皆様、アルバイトの学生たち、国際資源学部の皆様に御礼を申し上げます。



写真1 シンポジウムでのパネルディスカッションの様子



写真2 懇親会での秋田大学竿燈会におけるお囃子実演の様子



写真3 口頭による研究発表会



写真4 ポスターによる研究発表会



写真5 見学会場の鉱業博物館（3階から1階ホールを望む）

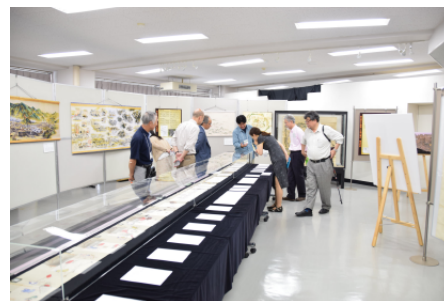


写真6 特別展「秋田に残る 鉱山絵図・絵巻の世界」の見学風景

旧制松本高等学校・創立100周年事業と「北杜夫と昆虫」サテライト企画展

信州大学自然科学館 館長 東城 幸治

2012年、松本キャンパス内に現在の自然科学館が開館した（図1）。廃液処理プラントとして使われてきた建物を譲り受け、改築したものである。旧制・松高（松本高等学校）の流れを引き継ぐ理学部が中心となり運営しているが、松高以前の明治期や大正初期に作成された標本も数多く収蔵している。2019年は松高創立から100年を迎える節目の年であり、自然科学館としても100周年を記念した様々な企画を執り行った。

その一つに、100年モノの標本利活用があげられる。学内GPという予算に採択されたプロジェクトの一環としての取組でもあった。当館は約40万点の植物標本を収蔵するが、明治時代に日本アルプスで採取された高山植物の腊葉標本も数多く収蔵している。「高山植物の女王」とも称されるコマクサやイワオウギの100年超の年月が経過した標

本（葉の一部）からの遺伝子解析に取り組み、いずれの種においても解析に成功した（図2）。特にコマクサは本学・学章のモチーフでもあることから、このGPを「学章プロジェクト」などと呼称してきた。動物でも、100年以上前に作成されたニホンライチョウの剥製（足裏の組織）からの遺伝子解析に成功した（図3）。これらの成果は、単に古い博物館標本の利活用に留まらず、超世紀的な



図1 信州大学自然科学館



図2 1908年にハケ岳で採取されたコマクサ標本

集団遺伝構造解析にも繋がる、科学的にも重要な成果といえる。遺伝子の本体としての DNA さえも明らかではなかった時代に作成された標本だけに、今回のような研究での利活用など、標本作成者（高山植物・ライチョウ共に松本女子師範学校・矢澤米三郎による標本）にとっては全くの想定外であったろう。裏を返せば、今、私たちが作成・収蔵している標本も、次世紀には想像を遥かに超えた利活用がなされるのかも知れず、そのような期待も込めながらコレクションの維持・管理をしてゆかねばならない。身が引締る思いである。

もう一つの新たな試みとして、学外でのサテライト企画展を開催した。その一つは、松高を代表する OB である芥川賞作家・北杜夫（本名・斎藤宗吉、以降は宗吉）に関する企画展であった（信州大学附属図書館との共催；図 4）。松本駅前通りの突き当たり位置する松高の跡地（あがたの森公園内の旧制高等学校記念館内）にて夏の約一ヶ月間の開催で、好評を頂いた。松高時代の宗吉のユニークなエピソード、宗吉が採取した昆虫標本、そして北杜夫の作品に関連づけた企画展であったが、ここでは学術的にも貴重かつ興味深い話題を紹介したい。

宗吉の松高入学は 1945 年（終戦年）の 8 月で、同年 5 月に東京の自宅が空襲被害に遭い、宗吉は他の学生に先立ち松本にやってきた（父・斎藤茂吉は地元・山形へ疎開）。思誠寮への入寮許可書を偽造し、一足先に松本入りし、すぐさま美ヶ原高原へと昆虫採集に出かけている。戦時中ゆえ、松高入学となる 8 月 1 日からは軍事工場（現・大町市）への学徒動員が予定されていた。戦況も厳しくなっており、おそらく敗戦や死をも覚悟した宗

吉は、入学直前の 7 月 24-29 日に憧れの上高地へと出かけ、昆虫採集を実現させた（作品「神河内」に詳しい）。27 日には西穂高岳へ登頂し、数多くの標本を残している（図 5）。8 月に入ってから動員先・大町で採取された昆虫の標本も多い（昼休みにでも採取していたのだろう）。これらの昆虫標本はタトウ紙に包まれた状態で保管されていたが、約十年前に展翅・展肢され、それぞれの分類群の専門家による種同定もなされている。戦時中、しかも敗戦が濃厚となった終戦間際の国内の昆虫標本など、おそらく他には類のない貴重なものであろう。中には日本初記録となる種も含まれている。これらの標本に対し、当初、私は「国内が大変な禍中に昆虫採集とは、余程の虫好き」といった印象を抱いていたが、多くの作品に触れ、ご本人やご家族との交流を通じ、「せめて死ぬ前に上高地を見ておきたかった」気持ちを想像するに至った。「お国」さえも信じられぬ敗戦が目前に迫る中、虫を追う一時が、唯一、恐怖や不安から解放される時間であったに違いない。

兎にも角にもエピソードに事欠かぬ宗吉が採取した数多くの昆虫標本は、「北杜夫コレクション」として管理されている。蝶や甲虫などの人気ある昆虫はもちろんのこと、時には「雑虫」とも呼ばれるような地味な昆虫類（ハエ類やトビケラ類、シリアゲムシ類など）も数多く収蔵されているのが特徴で、当時の信州の昆虫相を理解する上でも貴重なコレクションである。当時の松本市街で採取された湧水依存の昆虫なども含まれており（現在の市街地ではおそらく絶滅）、当時の、より豊富な湧水環境が想像される。今後も引き続き、学術的に利活用されるべきコレクションである。



図 3 1918 年に作成されたニホンライチョウ剥製からの DNA 解析の様子（学生との協働作業）



図 4 旧制・松高 100 周年記念「北杜夫と昆虫」サテライト企画展の様子



図 5 斎藤宗吉（北杜夫）の西穂高岳登山（1945 年 7 月 27 日）とこの日に採集された昆虫標本（タトウ標本：ラベルには皇紀 2605 年と記録されている）。現在は、展翅・展肢の上、保管されている

静岡大学キャンパスミュージアムの改修と“ウェルカムエリア”構想

静岡大学キャンパスミュージアム 館長 塚越 哲

静岡大学キャンパスミュージアムは、1999年に佐藤博明学長（当時）、池谷仙之運営委員長（同）の下で学内措置として発足し、理学部B棟の基礎部分の空間を利用して開館した。改修前の本格的な展示室は、旧生涯学習センターに在籍されていた金子淳准教授（現在桜美林大学）の手によって2013年にデザイン・整備されたものである。昨年度（2019年度）理学部B棟の改修工事が急遽決定され、キャンパスミュージアムも改修されることとなった。この大規模改修工事は、ちょうどミュージアムが設立されてから20周年を迎えた年に行われることとなり、無事この3月に工事を終えた（図1）。今回は「改築」ではなく、あくまでも「改修」であったため、スペースの増加や部屋割りの大幅な変更などは期待できず、限られた制約の中での更新にとどめなければならなかった。しかし折角訪れた貴重な機会ではあるので、この「改修」を最大限に生かして今後キャンパスミュージアムをこれまでとは違った新しい空間へと発展させることに挑戦してみたいと思う。工事の制約から、基礎となる壁（構造壁）に対しては位置の変更や、通り抜けを作ることにはできないが、パーティション等は動かすことができる。10余年前に整備された実習室は、必ずしも稼働率が高くはなかったもので、実習室と展示室を隔てていたパーティションを撤去して展示室を拡大した。その代わりに、展示室の一部を新たな実習室とした。また新たな展示室と資料室の境には固定壁を設け、ドアを2つ付けた。これによって、展示スペースが一続きと

なって拡大し、実習室は水道とシンクを備え、かつ標本室と隣り合わせになって機能的になった。（図2）。

改修を機会に効果的な展示が行えるよう、展示室は特に照明の自由度を増すように設計した。改修前の展示室と実習室（企画展時には展示室としていた）は蛍光灯照明だけであったが、2016年度企画展「第五福竜丸と静岡大学」以降は積極的にLEDによる落射照明を取り入れて展示を演出したことに鑑み、LED照明が自由に配置できるよう、天井レールコンセントを縦横に配置した。また壁と床の色も、展示スペース（エントランスと展示室）に関してはそれぞれ黒に近い灰色と灰色で統一し、空間としての一体感を配慮した。展示室と実習室にはほぼ全周にわたってピクチャーレールを設置し、同時に展示スペースの天井にはオブジェを吊り下げられるようフックも配した。外部に面した3か所の窓も、これを機に何らかの情報発信の場として活用したいと考えている。これまでほとんど活用されていなかった作業室も、この改修を機に標本の処理が快適に行える、より機能的なスペースとしたい（図2）。

今年度は学内の「設備マスタープラン」に基づいた設備整備計画書をキャンパスミュージアムとして初めて申請した。プロジェクト名は「東部キャンパス“ウェルカムエリア”の形成設備」とし、理学部B棟改修に伴う学園広場の整備と関連させ、キャンパスミュージアムの向かいにある大学文書資料室、両者の間に位置する理学部B棟ピロティを一体化させて、学外からの来訪者が最初に訪れることのできる“ウェルカムエリア”を構築するというものである。もちろん学内的には、文理融合や実物教育の拠点形成の意味をもち、より具体



図1：工事中のキャンパスミュージアム内部。
図2中の矢印の方向から撮影
（2020年2月5日撮影）

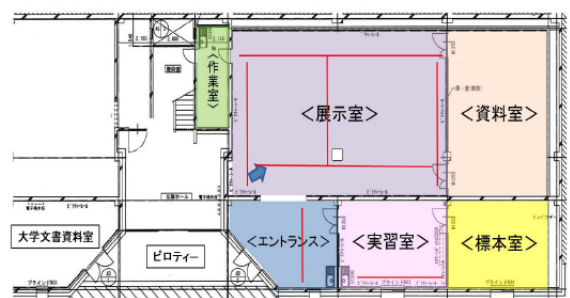


図2：改修後のキャンパスミュージアムの平面図
赤い線は天井レールコンセントの位置を示す

的には人文社会、教育、理学の3学部で行われる博物館学芸員コースの実習の場ともなる。もちろんこの申請は、大学文書資料室ならびに理学部との共同申請とした。「設備マスタープラン」は複数年にわたって募集されるので、近い将来採択されることを願っている。

“ウェルカムエリア”の発想は、今回の改修に伴う引っ越しの際、一時的に理学部A棟のピロティの一部を拝借したことに始まる。引っ越し時に運びきれない大きな杉の年輪や湿度の高い倉庫に保管できないタヌキのはく製（マスコット「しずおさん」）の仮設展示を当所で行わせていただき（図



図3：理学部A棟ピロティでの仮設展示
(2020年3月3日撮影)

3)、好評を得たことによる。このような発想で少しずつキャンパスミュージアムを他部局とのつながりの中で発展させてゆきたいと考えている。

現在のコロナ禍で改修後のグランドオープンの準備は停滞しているが、この事態の解除後には直ちに活動を開始し、秋の大学祭にはキャンパスミュージアムを新規グランドオープンさせたい（図4）。

*本稿は「静岡大学キャンパスミュージアムニュースレター No.21」の記事の内容を一部再録している。



図4：オープンに向けて準備中の展示室
(2020年6月5日撮影)

iPS細胞研究所設立10周年記念展示と 新型コロナウイルス感染防止のための休館措置

京都大学総合博物館 准教授 塩瀬 隆之

京都大学総合博物館では、2020年度特別展として京都大学iPS細胞研究所（CiRA(サイラ)）設立10周年記念展示を開催予定であった。しかし、本稿執筆時点（2020年5月20日現在）で、いまだ開催ができていない。新型コロナウイルスの感染防止のため、当初開館予定であった2020年4月8日から延期したものの、その後全国的に非常事態宣言が発令され、当館の所在地である京都府においても大学を含む各施設に休業要請が出ているため休館延長措置が継続中である。

昨年準備を進めていた企画展では、ノーベル医学生理学賞受賞の山中伸弥教授のグループが世界に先駆けて開発に成功した2006年のiPS細胞研究から始まることは当然である。そして、この細胞を使って世に新たな治療法を送り出すため、また、まだ見ぬ生命の謎を解き明かすために産声をあげた「iPS細胞研究所（CiRA＝サイラ）」の開所から10周年を記念して企画された。

CiRAは、山中所長が空間・組織など細部までこ

だわりぬいて設立した機関ということもあり、「こだわりの研究所を大解剖」と副題をうった。新たな研究所のモデルとなることを目指していて、オープンラボをはじめとするチャレンジングな仕掛けがふんだんに盛り込まれている。設立からの10年間で、当初の150名から現在の600名規模へと成長し、特許の専門家からファンドレイザー、サイエンスイラストレーターまで、多様な研究支援、研究環境整備のプロが脇を固め、世界でも類を見ない研究環境が整備された施設の一つである。

展示チームにはCiRA国際広報室のスタッフを中心に、展示デザイナー、本学情報環境機構のコンテンツ・デザイン支援の研究者らスタッフ、当館教員とが参集し、展示コンセプトから展示計画までを固めてきた。iPS細胞も開発から医療応用に向かって研究ステージが日進月歩で進むにつれ、研究者だけでなく、患者さん、政府、企業、市民による多くの理解と支援によってはじめて実現できた。この多様な支えそのものをいかに展示の中で来館者に見てもらえるようにできるか、これが展示チームに課せられた使命の一つである。

展示コーナーには、iPS細胞の発見からノーベル賞受賞、そして「iPS細胞を医療に」という目標に

掲げて歩みだしたこの新しい研究所が歩んだ歴史が紹介されている。展示チームが特に心掛けたことの一つは、普段は知る機会のない CiRA の職員たちの多様な素顔を紹介することであった。仕事の内容ややりがい、趣味などから、多面的にその姿を描き出すことを心掛けた。ピペットと呼ばれる細胞培養などに欠かせない道具に対する研究者、技術者の思い入れは展示チームがとくに心惹かれたインタビューの一つでもある。CiRA で行われている研究は、基礎から応用まで多岐にわたるが、その多様さについては市民に十分に届いているとはいいいがたい。研究者が力を発揮できる環境を整えるために、実験機器の管理、特許、寄付募集の専門家が脇を固めていることを来館者に届けたい。

動物標本や鉱物標本のように、目視できる粒度の展示品が並ぶ場合と異なり、天文や細胞などは研究対象のスケールが大きく異なる。言わずもがな電子顕微鏡の向こう側で起きている研究者の好奇心、努力、工夫などもまたミクロンオーダーの世界となり、展示チームをはじめとして当該分野の門外漢から見ればその醍醐味を味わうことは難しい。そこで展示チームとしては、体験と共有を重視し、CiRA で使われている実験用具やオリジナル白衣のほか、CiRA で開発された教材などを体験し、さらには iPS 細胞を顕微鏡でのぞけるように体験型の展示も準備した。この体験型展示の多用

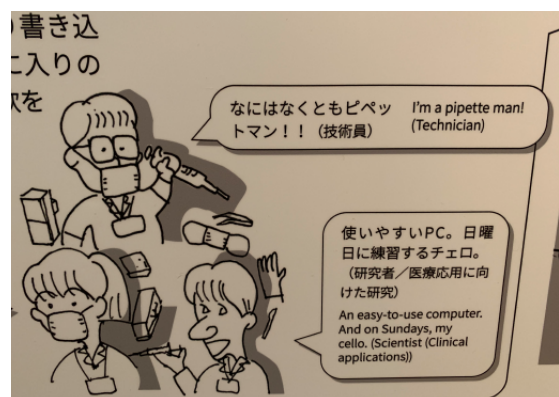
は、今回の新型コロナウイルス感染防止対策と相性が悪く、感染防止の観点から三密を避けるという方針においては想定通り体験いただけないことは、展示デザインの観点からは忸怩たる思いである。

大学博物館においては、通常の博物館以上に展示物が抽象的で難解なモノを対象とする展示を企画することが多い。ノーベル化学賞受賞者の福井謙一誕生百年展では数式と化学式が展示対象であり、その展示に大きな工夫を要したが、細胞もまた数式に匹敵するほどの難易度があった。そもそも通常の細胞と iPS 細胞とが見分けがつかないというのが展示デザイン泣かせである（展示担当者の立場からは区別がつく方が展示しやすいという意味において）。

2020 年 5 月 20 日現在、展示チームとしてはオンラインツアーなど現在のデジタル技術を駆使してのバーチャルな展示空間の公開について様々に検討している最中である。すでに 360 度カメラによる展示室の紹介や、ふだんは鑑賞できない位置からの紹介など、この状況を逆にチャンスととらえた新たな展示技法による紹介を試みている。京都大学総合博物館 Facebook では、展示の準備風景を含めて新たな発信方法を模索していく予定である。



1) 実験室再現展示と CiRA 専用白衣の着用体験



2) 多様な職種のスタッフが脇を固める研究環境

特別展「香川大学第五代学長 倉田貞美博士の業績」

香川大学博物館 事務補佐員 井上 幸恵・館長 寺林 優

香川大学博物館（以下、博物館）では、特別展「香川大学第五代学長 倉田貞美博士の業績」を開催した。会期は2020（令和2）年2月19日（水）から3月24日（火）までの予定であったが、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため3月14日（土）で早期終了した。会期中に予定されていた田山泰三氏（『倉田貞美著作集』校訂者）による特別講演（博物館第77回ミュージアム・レクチャー）「倉田貞美博士の生涯と学問」も中止を余儀なくされた。19日間で148名の入館者があった。

倉田貞美（くらたさだよし、1908-1994）博士は、香川大学教授を長く務められ、多くの学生を指導される一方で、生涯にわたり漢文学、特に清代末期から中華民国時代に至るまでの漢詩人の作品と時代背景を研究された。倉田博士は、この時期を研究する漢文学者として国内



図1 特別展チラシ

で唯一無二の存在であった。香川大学では、学芸学部長、教育学部長を経て、1970年に第五代学長に就任された。教育学部から初めて選出された学長で、3年間の任務を全うされた。

本特別展は、年度計画になかったが、2019（令和元）年に『倉田貞美著作集』が発刊されたのを機に、香川大学創立70周年記念事業の一つとして年度内に開催することになり、実行委員会を急遽結成して準備を進めた。会期初日の2020年2月19日（水）には、オープニングセレモニーを開催し、寺林優博物館長の挨拶、浜田恵造香川県知事の祝辞に引き続き、倉田博士のご子息で『倉田貞美著作集』の共著者である倉田定宣氏（故人）ご令室の倉田和務氏、浜田知事、香川大学の近藤浩二元学長、株式会社大修館書店の鈴木一行代表取締役社長、全国漢文教育学会の田山泰三評議員ら来賓、寛善行香川大学長および博物館長の7名に

よるテープカットを挙行了した。オープニングセレモニー後には、田山泰三氏による展示解説が行われ、華々しく会期がスタートした。

本特別展では、倉田博士の研究テーマである、清代末期から中華民国時代に至るまでの漢詩人の作品と時代背景だけでなく、倉田博士の学生時代から、香川大学学長として3年間の任期を務め終えられるまでの「研究者であり続ける姿勢」、「教育者に必要な資質」、そして学生運動の嵐の中で「大学の矜持を守り抜くための人間性」とは何かを展示資料とパネルで紹介した。

最も注目すべき展示は、東京文理科大学卒業論文『中國現代詩の研究』であった。倉田博士は、自身の卒業論文を常に手元に置いて加筆・訂正を行い、スペースが足りない場合には、紙を貼り付けて加筆を続けられた。研究を継続され、「醗酵期」ともいうべき清末民初詩壇の実態の全面的究明に取り組まれた。卒業論文から三十年余りのちの1968年に、学位論文『清末民初を中心とした中国近代詩の研究』が完成し、東京教育大学から文学博士が授与された。そして、1969年に株式会社大修館書店から出版された。

倉田博士が研究に用いた中華民国時代の中国語新聞記事などを切り貼りしたスクラップブックや蔵書・資料をデータベース化した情報カードなども展示した。さらに、倉田博士の恩師で『大漢和辞典』の編著者でもある諸橋轍次博士との関わりについても紹介した。諸橋博士が倉田博士に宛てた書簡や書作品なども展示し、生涯を通じての恩師との関わりについても深く考えさせられるものであった。

当時も学問の中心は東京であったが、香川という地方にしながら、どのようにして最新の情報を得て、単に享受するだけでなく発信するための方策は何か、また膨大な資料とそれらの詳細な分析にもとづく研究手法は、高度情報化時代である現在において、情報が溢れる中、地方大学で研究する者が学ぶべきことが多いと思われる。さらに総説、レビュー論文は、特定のテーマの単なるまとめではなく、オリジナリティのあるアイデアを創出するものであることは、当時も現在も、人文系でも自然系においても変わらず、一流の研究者のみが可能とするものであることを展示から紹介した。

倉田博士が研究した中国の詩人らを紹介した。

郭沫若（1892-1978）は岡山の旧制第六高等学校留学中に友人成仿吾と栗林公園を訪れ、一編の五言詩を詠んだ。郭沫若は中華人民共和国成立後に政務院副総理、中国科学院院長、中日友好協会名誉会長などの要職を歴任したが、若き日に栗林公園に遊び、紫雲山に登臨して感慨を詠じたことはほとんど知られていない。張香山（1914-2009）は東京高等師範学校で戦前に日本語を学んでいた際に倉田博士と親交があった。香川県出身の大平正芳元内閣総理大臣が、総理就任前に日中国交正常化交渉に当たっていた時期に、中華人民共和国の要職に就いていた張香山が1973（昭和48）年に高松を来訪した折には、倉田博士が高松空港に出迎えて二日間行動を共にしている。

新型コロナウイルス感染症拡大以前には、香川県にも東アジアの国々を中心に、海外から多くの人が訪れていた。一見すると国家間の障壁が低く

なっているかのように思われるが、どうしても取り除くことができない壁が未だに存在するのも事実である。倉田博士が研究対象とされていた時代、学ばれていた時代の日本との交流と状況を知ることによって、相互理解がより深まるのではないかと考えさせられた。

倉田博士は、学生運動の嵐が吹き荒れる中、卓越した経営手腕で大学の矜持を守り抜き、そのような状況でも全学での卒業式を挙行することが可能となった。昭和44年度、45年度、46年度の卒業式告辞をパネル展示した。香川大学の令和元年度卒業式・修了式は、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため中止となったが、寛善行香川大学長は卒業生・修了生へのお祝いメッセージをYouTubeで発信したが、その中で倉田博士の告辞の一部が紹介されている。



図2 オープニングセレモニーでのテープカット 左から田山、鈴木、浜田、倉田、寛、近藤、寺林（敬称略）



図3 田山泰三氏（左から2人目）による展示解説（左端は浜田恵造香川県知事）



図4 展示室



図5 東京文理科大学卒業論文『中國現代詩の研究』



図6 スクラップブック

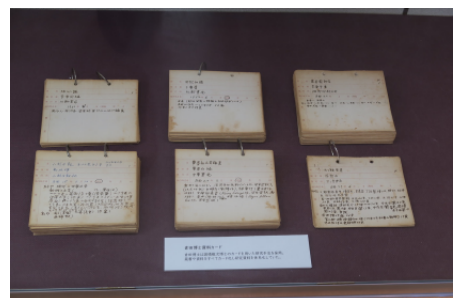


図7 情報カード

各施設の再開に向けて

このたび、新型コロナウイルス感染症への対応に関し、全国に出されていた緊急事態宣言が解除されました（2020年5月26日現在）。しかし、ウイルスの脅威が完全に無くなったわけではなく、依然として油断できない状況であるため、各施設の再開については、感染予防に対して最大限の対策を実施することが不可欠と思われます。

以下は、施設再開に向けて新型コロナウイルス感染拡大予防対策の検討に有用な情報や実施すべき基本的事項をまとめたウェブサイトへのリンク集です。博物館利用者と職員の安全を確保するための対策立案の参考になれば幸いです。情報は更新され続けているので、常に最新の情報を確認するようにしてください。

- ・ **新型コロナウイルス対応（国の方針等）**

<https://corona.go.jp>

- ・ **新型コロナウイルスに関連した感染症対策に関する対応について（文部科学省）**

https://www.mext.go.jp/a_menu/coronavirus/index.html

- ・ **新型コロナウイルスに関連した感染症対策に関する対応について（文化庁）**

https://www.bunka.go.jp/koho_hodo_oshirase/sonota_oshirase/20200206.html

- ・ **新型コロナウイルス感染症予防にかかる美術館博物館等の作品消毒の相談窓口について（文化庁）**

https://www.bunka.go.jp/koho_hodo_oshirase/sonota_oshirase/pdf/202004242000_01.pdf

- ・ **感染拡大の予防と研究活動の両立に向けたガイドライン（文部科学省）**

https://www.mext.go.jp/content/20200515_mxt_kouhou02_mext_00028_01.pdf

- ・ **ICOM（国際博物館会議）による美術館・博物館の再開のための基本対策**

<https://icom.museum/en/news/museums-and-end-of-lockdown-ensuring-the-safety-of-the-public-and-staff/>

- ・ **博物館における新型コロナウイルス感染拡大予防ガイドライン（日本博物館協会）**

<https://www.j-muse.or.jp/02program/pdf/coronaguide0000.pdf>

MUSEO ACADEMIAE 第 22 号
大学博物館等協議会ニュースレター

発行日
発行者
編集

2020 年 6 月 30 日
大学博物館等協議会
京都大学総合博物館 075-753-3272
〒606-8501 京都府京都市左京区吉田本町